

国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「電話」の発明と社会的なフキユウ^アは、人間という動物のコミュニケーションに、これまでに存在していなかった新しい「場 (topos)」を付けくわえた。ここでは、その回線の通じている時間だけ、ヘダ^イてていた距離がバーチャルに意味を失うかのように感じられた。そうした不思議な近接の経験が、社会の日常のところどころに深く浸透していく。

フィッシャーという都市社会学者が、『電話するアメリカ』^Aで引用している回想は、たぶん二〇世紀シ^ウョトウのありふれた風景であったにちがいない。けれども、現代のわれわれからすれば、感じるができなくなってしまう新鮮な「驚き」を記録していて興味深い。サンフランシスコ州アンティオーク在住のこの老人は、第一次大戦前のアメリカで、ユウ^エフクな家にたずねていた少年の日のことを思い出して、次のように語る。

昼食前にお邪魔していると電話が鳴ったんだ。それは手動式のマグネット・フォンで、とりつけたばかりだった。ヘンリーさんは電話で話したあと、「今、私はコンコード（マサチューセッツ州のポストンに近い町）と話したんだぞ！ 居間にいる君と話しているのと変わらんのだよ」といつて、驚喜^aして浮かれていた。彼はすっかり電話に夢中だったが、私のほうはといえばそれほど感動しなかった。新奇な発明品や進歩といったものを軽く見ていたんだ。だけれども、あれはとんでもない機械だったんだな。[Fischer 1992 = 1000: 281]

アンティオークとコンコードという、アメリカ大陸を東西にほぼ横断するほど離れて遠くにいるひと同士が、まるで居間でともにいるかのように話した。I 奇跡を見たかのように、その経験に興奮している主人と、居間の傍観者の冷静あるいは無関心とのギャップは、重要ななにかが、そこにおいて共有されていないことを暗示している。

しかし、それは傍観者であった老人が回想でゲン^オキユウしているような「発明品」への関心でも、「進歩」を軽く見ていたかどうかでもなかった。

分かち合われていなかったのは、「経験」それ自体の衝撃である。ある身体感覚が、電話口で新たに生みだされた。遠方に暮らしているキユウ^カチの友人と、まるでその居間にもにいるかのように「話す」ことができた。そのバーチャルな経験は、受話器を持つ「ヘンリーさん」だけのものであった。まるで見えない、離れたところにいるはずの人の声が、耳元で「聞こえた」。その空間経験と身体感覚こそが、同じ居間で近くにいたはずの二人のあいだで共有されていなかったのである。

なぜ、その驚きが共有されなかったのだろうか。

簡単である。電話によってわれわれの生活に付け加えられた「場」すなわち空間が、そもそも傍観する他者 Ⅱ 第三者を、同一の経験のなかに巻き込まないものだったからである。

一人の話し手と、一人の聞き手がいる。しかしそれ以外のすべての第三者は、電話空間の外に取り残される。

と同時に、受話器を耳に当てている人間もまた、対話が進むにつれて、周囲の現実空間から切り離されて、分離してしまう。

B 従来の声の空間とは明らかに異質であった。すでに論じたように、声は拡がる振動と身体の共鳴において、その空間を満たす空気を生みだした。それゆえ、そこに存在するすべてのひとを巻き込む共同の音の世界をつくりあげてきた。しかし電話という二次的な声のカイザイは、この空間の構造を変容させていく。複雑にし、分裂させ、その一部を他の身体には感じとりにくいものにした。電話の会話を通じて構成されるバーチャルな空間と、自らの身体が位置する現実のローカルな空間とは、話し手と聞き手の身体を接点として二重化する。しかも、その二重化は、特有の亀裂をともないつつ社会に浸透していく。つまり、いわゆる「バーチャル」な空間と「ローカル」な空間とが、分裂しはじめるのである。

かつて音は空間にひとつの秩序をつくりあげていた。すなわち、ローカルな現実空間において、音の強弱がつくりだす距離の知覚は、空間内の存在の配置を縁取る重要な条件であった。

われわれが日常的に使う慣用語（フレーズ）にも、この距離の秩序の感覚は明らかに刻み込まれている。 Ⅲ 「声が聞こえたので、ご挨拶を…」と知り合いに近づく。それは、相手が偶然にも近くに居ることに気づくことであった。また「声をかける」のは、あまりヨキしていなかった場所でもまたま知り合いを見かければこそその反応だろう。いずれの「声」も、お互いの身体が近づいて、同じ空間に居合わせたという条件をガンイしている。

しかしながら、電話のコミュニケーションにおける声の共有は、身体をとりまく空間のありようからはまったく分離している。ただ音や声だけが、お互いが存在する別々の場所に送られる。音声だけが切り取られ、複製されて、受話器の向こうの人間の耳に届けられている。

一方に音声だけによって構成される二次的で認知的な空間（回線上の電話空間）があり、他方に身体感覚によって統合された現実のローカルな空間がある。その二つは、微妙な亀裂をほらみつつも、話し手の身体という一点においては接合している。しかし、傍らにいる現実空間の他者の経験においては完全に異なる。回線上の電話空間からはまったく排除され、けっして巻き込まれることがない。そうした他者までもふくめた重層的な空間構成と、そこで生みだされる異質な経験の集合こそ、われわれが分析すべき広義の電話空間であった。

さきほど「特有の亀裂をともないつつ社会に浸透していく」と述べた。電話という装置の急速な浸透と日常化とともに、何が起こったのか。

一言でいえば、われわれの身体は、「一次的な声」の持つ空間の構築力ともいべきものに、鈍感になっていったのではないだろうか。声を軸にして作りだされた空間は、それ自体が視覚やヒフ感覚を巻き込んで複合的な秩序をつくりあげ、持続的で強力であった。もちろん、われわれには特別になにかを失った自覚などない。しかしながら、ここで起こっているのは、コミュニケーションの根本にかかわる変容である。

しかも、その変容は明確な効果の自覚をもたないままに進んでいった。そうしていつのまにか、身体現象としての声を持つ、意味に満たされた空間（あるいは「空気」）をつくりだす力が見えなくなった。声が空間を作る力の複合性や根元性が、どこか気づきにくく、感じにくい領域へと追いやられていく。

電話が伝えてくれる声は、なるほど電氣的な複製の音声である。しかし、複製と意識しないでいいほどに、耳に自然かつリアルに響く。ちょうど、同じく一九世紀の発明品である光学的科学的複製技術としての写真が、目に自然なりアリティをもって、光景を切り取り縮約して、視覚経験として複製してくれたのとまったく同じように、である。

電話空間の魅力は、まさにこの複製された声の感覚的な直接性あるいはリアルさにあった。その点において、先行する電信の記号世界と大きく異なっていた。その複製技術システムのバーチャルな新しさは、まさに衝撃的なものだったにちがいない。

立ち止まって考えてみれば、写真の持つ視覚的なリアルティもまた、複製技術によってバーチャルに再構成されたものである。写真は二次元に貼り付けられた風景の画像で、視覚的な認識においては近似の経験でありながら、身体の動きによって確認できる現実空間の奥行きをもたない。同様に、電話の声はスピーカーのコーン紙のような、振動する膜の強弱高低に転写されたものにもすぎない。カメラの視覚と同じようにスピーカーの聴覚においても、現実の身体をとりまく空間の奥行きは、いわば媒体の平面に写しとられている。平面的な媒体によって、再現され、再生されている。

電話との出会いにおいて、われわれが手に入れた経験の場もまた、すでにあらかじめ奥行きと広がりとは失われている。現実空間のもっていた厚みや深さが失われ、しかもそこに直接に触れにくくなっている。その意味においての「バーチャル」は、平面化された「虚」の空間である。しかし、「バーチャル」のもともとの語感が、ラテン語の「力のある」という意味から生みだされていることは興味ぶかい。ここでも声としての「ことば」の持つ意味記号としての安定した力が、その不自然さを押し隠す役割を果たした。これまでにない水準での声のリアルさへの驚きは、奥行きがない不自然さの認識よりはるかに強いものであった。

もちろん、それは回線上の狭義の電話空間のなかだけを満たすりアリティである。そして電話する人間の経験は、電話空間のなかだけで完結するわけではない。

電話をかけている最中も、切ったあとも、身体を中心としたローカルな現実空間は消え去らな

い。それゆえ、われわれは経験に付加された電話というメディア空間のコミュニケーション規則と、身体が慣れ親しんだローカルな現実空間の経験的な規則との二つを、織り交ぜつつ切り替えて暮らすことになった。そうした複合的な空間経験を、「仮想―疑似―バーチャル」と「現実―真生―リアル」の二項対立で切り分けて論じるのは単純にすぎる。むしろ、身体が向かいあっている現実が見落とされてしまいうだろう。人間は、この二つの空間規則の重層と接合のただなかに生きていくからである。

(佐藤健二『ケータイ化する日本語——モバイル時代の「感じる」「伝える」「考える」』)

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	フ	キ	ユ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
フキユウ	ヘダテ	シヨトウ	ユウフク	ゲンキユウ	キユウチ	カイザイ	ヨキ	ガンイ	ヒフ	ヒフ
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10

問2 傍線部a～dの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	b	c	d
驚喜	縁取る	傍ら	近似
11	12	13	14

- 問3 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。Ⅰ 15 ・ Ⅱ 16 ・ Ⅲ 17
- ① あたかも ② ひいては ③ ちなみに ④ すなわち ⑤ たとえば

問4 傍線部A「『電話するアメリカ』で引用している回想」とあるが、筆者がこの回想を取りあげるのは何のためだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 18

- ① どんなに遠く離れた人とも好きなきときに交流することを可能にする電話の利便性を読者に伝え、さらにその経験を通じて感動しているのは電話で話をした本人のみであるということを強調するため。
- ② 遠くに住む人とも間近で会話を交わしているような気分させる電話の不思議さを読者に想起させ、さらにその恩恵にあずかれるのは電話を所有できる金満家に限られるという状況を糾弾するため。
- ③ はるか遠くにいる人と同じ空間で話しているかのように感じさせる電話の特異性を読者に再認識させ、さらにその経験に参加できるのは電話口にいる当事者に限られるという事実を指摘するため。
- ④ 現実の距離を超越して同じ場所で話していると錯覚させる電話の機能性を読者に印象づけ、さらにその経験に関わることができるのは電話の近くに控える人びとに限定されるという点を明示するため。
- ⑤ 距離を無意味化して耳元に声を届けてくれる電話の技術的な可能性を読者に理解させ、さらにそのことに興奮を覚えるのは電話という発明品に価値を見いだしている人だけだという現実を周知するため。

問5 傍線部B「従来の声の空間とは明らかに異質であった。」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 19

- ① 人の肉声は振動として拡がっていき、周囲の人びとと共有できる空間をつくってきたが、電話の二次的な音声になると聞く人の身体に直接響く力が乏しくなり、通話中の二者以外の人は漏れ聞こえてくる会話に参加する気を失っていったということ。
- ② 人の肉声はその人の存在や遠近を知らせ、周囲の人を巻き込む空間をつくってきたが、電話が登場するとそれまでにはなかったバーチャルな回線上の空間が生まれ、通話中の二者は現実空間にいながらにして周囲の人と乖離かいりしていったということ。
- ③ 人の肉声は誰が発しているのか知覚可能で、周囲の人が知り合いと交流しやすい空間をつくってきたが、電話になると音声の不鮮明なせいで誰からの電話か特定しにくく、通話中の二者以外の人は電話空間から排除されることになったということ。
- ④ 人の肉声はその強弱で距離がわかり、周囲の人にその人が同じ空間にいると知らせてくれるものだったが、電話によって音量と距離との関連性がなくなり、通話中の二者は現実空間に相手がいるかのように距離感覚を狂わせてしまったということ。
- ⑤ 人の肉声は近くにいる人の耳に入り、周囲の人と同じ空間で生きていることを実感させるものだったが、電話によってそれまでとは異なる閉鎖的な空間がつけられ、通話中の二者は現実空間にいる人びとに配慮することがなくなったということ。

問6 傍線部C「光学的科学的複製技術としての写真」とあるが、ここでの「写真」と「電話」について説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 20

- ① どちらも複製技術であるが、「写真」が実際の視覚経験には及ばないのに対し、「電話」は二次的な音声だと気づかせないほどリアリティがある点では異なっている。
- ② どちらも複製技術であるが、「写真」が平面的で現実空間の奥行きをもたないのに対し、「電話」はリアルな音声空間に響くため広がりをもつ点では異なっている。
- ③ どちらも複製技術であるが、現実と変わらないリアリティで人びとを魅了した結果、現実空間の奥行きの有無に固執しない方向へと意識を変革した点で共通している。
- ④ どちらも複製技術であり、現実をそのまま写しとったかのようなリアリティが備わっているため、視覚や聴覚といった身体感覚の代わりになり得る点で共通している。
- ⑤ どちらも複製技術であり、現実の身体が感じとるような空間の奥行きは失われているにもかかわらず、そのリアルさゆえに違和感を覚えさせない点で共通している。

問7 傍線部D「人間は、この二つの空間規則の重層と接合のただなかを生きている」とあるが、

その具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 21

- ① 人間は通話中、相手との会話に没頭して周囲とは異なる経験をしているが、目の前で急用を知らせる身振りをされると、即座に現実空間へと意識を戻して対応できる。
- ② 人間は電話をしながら自分がいる場所の状況にも気を配っており、電話の相手への相づちはいい加減にして、現実世界でのコミュニケーションを大切にしている。
- ③ 人間は電話をかけている際、同席している友人にはお構いなしに電話口でのやり取りに夢中になるので、自分一人だけが楽しんで周りの空気を白けさせてしまう。
- ④ 人間は電話を切ったあとでも先ほどまでの会話の余韻を引きずり、電話で話した内容が気になって勉強が手につかなくなり、日常生活に支障をきたすことになる。
- ⑤ 人間は通話を始めると、聞こえてくる声のリアルさから相手がそばにるように錯覚し、バーチャルな世界での会話だけで満足して、本人に会う必要を感じなくなる。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 22

- ① 電話の登場によって人間は対面せずにコミュニケーションをとる機会が増えていったため、聞こえてくる声のみを頼りに相手の思いをくみ取る能力を身につけていった。
- ② 電話という機械を通した音声は身体を共鳴させるような力をもたないので、電話の相手とのあいだに構成されるバーチャルな空間は、現実の空間に凌駕りやうがされていった。
- ③ 電話とは異なるローカルな現実空間での会話において、声の強弱はひと同士心の距離を測る手段となり得るため、声をかけるかどうかの指標として用いられてきた。
- ④ 電話によるバーチャルな空間でのコミュニケーションになじむことで、われわれは生身の声が周囲に影響をおよぼして意味に満ちた空間をつくりだす力に気づきにくくなった。
- ⑤ 電話はことばを伝えるための機械であり、意味を伝達するという役割さえ果たせばよいので、現実空間にあるような厚みや深さは不要なものとして排除されていった。

第2問

次の文章は、『海人の苺藻』の一節で、男（新中納言）が女君を初めて訪ねた場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

女君、ものにおそはるる心地しておどろき給へば、男の、馴れ顔に装束をさへ解きて添ひ臥して、何やかやとのたまふに、ひたぶるによそなる人とは思しも寄りて、「この近き権大納言にや」と思ふに、せん方なく、悲しともおろかなり。

ただ泣き沈み給ふを、「あが君、などかくしも憎ませ給ふ。さすがちごならぬ御ほどなれば、聞き給ひけん。聞こえさせてもほど経る身を、雲居に思し立つなれば、いかなる山の奥に籠り侍るとも、『我ゆゑかうなりにけり』と思し知らせんと思ふばかりにかく見え奉るを、かけても、なめげなれば、かけかけしき筋は思ひ離れたるを、心にも従はず身にもまかせぬ御契りのさすがに侍るも、言ふかひなきものから嬉しく」とのたまひ続くぞ、あらぬ人と聞き分き給へど、さりとして慰みぬべき心地もし給はず、いとあさましく心憂しとも世のつねなり。

中將おどろきて見れば、おはせず。「いづく」と思ふに、御帳のうちに人の声聞こゆるに、おどろきて参り寄りたる。「こは誰ぞ」とおどろかれぬ。「同じ心に導き給へよ。今よりは知る人になん」と、あてに若やかなる声にてのたまふに、あさまじうて、「はや、とく出でさせ給へ」と言へば、「わたくしごとのやうにて聞こえせん。あなかしこ」など、後瀬をかけてのたまふに、上の御方より、「御髪は果てぬるにや。小姫君の御髪、あしう沙汰し侍るを、とかく聞こえさせ給ひて、ただ今なん隙あきて侍る」など言ふに、力付きたる心地して、中將、「御心地をわづらひて御帳におはします。はや、とくわたらせ給へ」と答ふるに、いとあさましく、「かかることは人の言ふものか」と恨みて、「よしなき身と思ひ取りてこそ、これまでも参り来つれ。上おはするとも動かじ」とて、いとど添ひ臥したるは、世のつねならば憎くもあるべきを、あはれにうち泣きつつ契り給ふに、憂くつらくとも、さすがはしたなめんもさま変はりたるを。少しもの心も知り用意ある人こそあれ、中將はとかく言ひ腹立つほどに、上おはする音して、女房などの声して、障子など開くるに、さすがつれなくともこの御ためいとほしきに、「さらばまかりなんよ一言だにのたまへ」とのたまふに、涙にむせびて、少しゆるるべ給へるに、ゐざり退きてわななき居給へるに、恨めしければ、また、「さは、かくて侍らん。上おはして、勘当し給はんこそ、嬉しがるべけれ」とて、

宵の間に結びし草のゆかりぞと絶えぬ涙に袖や朽ちなん
とのたまへど、君はいとどおぢまさり給へるを、中將、「すかしやり奉らん」とて、
宵の間と思ひな絶えそ長き世に絶えぬ契りの端とこそなれ

と慰むるに、上おはしたれば、帯などは手に持ちながら出で給ひたるに、ありつる童待ち居たり。向かひに御車召して帰り給ふ。まだ宵と思したるに、いたく更けにけり。

(注)

権大納言——女君の姉の夫で、後に女君と新中納言の結婚の仲介をする。

中将——女君に仕える女房。

上——女君の母。

小姫君——女君の妹。

さすがはしたなめんもさま変はりたるを——そうはいつても、きまりの悪い思いをさせるのは見苦しいものである。

すかしやり奉らん——おだてて行かせ申し上げよう。

問1 傍線部ア～ウの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

ア 権大納言 23

イ 経る 24

ウ 御髪 25

問2 波線部あゝおの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ おどろき給へば

26

- ① おどおどしていらっしやるので
- ② はっと目をお覚ましになると
- ③ びっくりなきったので
- ④ あきれていらっしやる
- ⑤ 目を見張っておられるので

い 言ふかひなきものから

27

- ① 言つてもしかたがないものの
- ② 言いようがないほどだから
- ③ どうしても言わずにはおられないほど
- ④ 言うまでもないことだが
- ⑤ なんとも言えないほど

う あさましく

28

- ① 仰々しく
- ② 見苦しく
- ③ 心がいやしく
- ④ 恐ろしく
- ⑤ 驚きあきれて

え あてに

29

- ① 一途いちずで
- ② 素直で
- ③ まじめで
- ④ 上品で
- ⑤ はなやかで

お つれなくても

30

- ① 冷淡にしている
- ② どうにもしかたなくて
- ③ 並ぶものがなくても
- ④ 平然としている
- ⑤ だらしなくしている

問3 二重傍線部 a 「るる」・ f 「れ」・ i 「る」の助動詞の用法の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 31

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|
| ① | a | 自発 | f | 受身 | i | 尊敬 |
| ② | a | 受身 | f | 自発 | i | 尊敬 |
| ③ | a | 受身 | f | 自発 | i | 完了 |
| ④ | a | 自発 | f | 受身 | i | 完了 |
| ⑤ | a | 尊敬 | f | 完了 | i | 自発 |

問4 二重傍線部 b・d・e・j の「に」の文法的説明の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 32

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|---------|---|---------|---|---------|
| ① | b | 断定の助動詞 | d | 副詞の一部 | e | 順接の接続助詞 | j | 逆接の接続助詞 |
| ② | b | 断定の助動詞 | d | 形容動詞の一部 | e | 格助詞 | j | 逆接の接続助詞 |
| ③ | b | 格助詞 | d | 副詞の一部 | e | 逆接の接続助詞 | j | 断定の助動詞 |
| ④ | b | 係助詞の一部 | d | 形容動詞の一部 | e | 順接の接続助詞 | j | 完了の助動詞 |
| ⑤ | b | 係助詞の一部 | d | 断定の助動詞 | e | 格助詞 | j | 完了の助動詞 |

問5 二重傍線部 c 「見え奉る」・ g 「のたまふ」・ h 「おはする」の敬意の対象として最も適切なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 33・ 34・ 35

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|---------|---|----|---|------|---|-----|
| ① | 女君 | ② | 男(新中納言) | ③ | 中将 | ④ | 女君の母 | ⑤ | 小姫君 |
|---|----|---|---------|---|----|---|------|---|-----|

問6 傍線部 A 「悲しともおろかなり」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 36

- ① 悲しいなどという言葉では、とても言い尽くせない
- ② 悲しくて、どうしてよいかわからない気持ちである
- ③ 悲しいというよりも、むしろ嘆かわしい気持ちである
- ④ 悲しいというのは、あまりにも痛ましいことである
- ⑤ 悲しむだけでは、全く解決できない

問7 傍線部B「我ゆるかうなりにけり」をわかりやすく説明したものとして最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

37

① 思いが遂げられなかったら山に逃げていくような心弱い男なので、女君からも嫌われてしまった。

② 女君が男を権大納言と間違えるような浮ついた気持ちをしているから、男は女君を諦めることになった。

③ 女君は男が恋い慕っていることを知りながら入内じんだいしてしまうので、男は出家する決心をってしまった。

④ 男は女君に冷たくされたのを、女君が入内するからだとして誤解してしまい山奥に隠遁いんとんしてしまった。

⑤ 女君が入内する決心をして男の願いを聞き入れないので、男は山奥に籠もることになってしまった。

問8 傍線部C「わたくしごとのやうにて聞こえさせん。あなかしこ」とあるが、男は中将にどのようなことを頼んでいるのか。最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

38

① 中将に私信のようにして渡す手紙を、女君に差し上げて会う手引きをしてくれること。

② 私のことを女君に褒めたたえて、女君が私に会う気になるようにしむけてくれること。

③ 中将に私的な用事があつて訪ねてくる時に、女君のところに案内してくれること。

④ 女君に会いたい私の秘めた望みを理解して、女君に会える機会を作ってくれること。

⑤ 女君には嫌われたが、中将には度々手紙を差し上げるので受け取ってくれること。

問9 傍線部D「はや、とくわたらせ給へ」と中将が言った理由として適當でないものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。

39

① 女君が男の強情さに気分を悪くされて、泣きながら臥せっておられたから。

② 正体不明の男が無断で忍び込んで来て、女君が迷惑がっておられたから。

③ 見知らぬ男が馴れ馴れしく話しかけてきて、どう対応してよいかわからなかったから。

④ 上の方が女君のところに来られて、男と顔を合わせるのとは好ましくないと考えたから。

⑤ 男が女君と親しく交際するようになると、女君の入内の差し障りになると思ったから。

問10 傍線部E「少しものの心も知り用意ある人こそあれ」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 40

- ① 男が少しは女君の心情をくみ取り、もっと気遣いのできる人であればよいのに
- ② 中将よりも少しは人情を解することのできる女房がいると、男は思っているので
- ③ 男は中将の気遣いを読み取って、どうすればよいかを判断できる人なので
- ④ 中将が男の態度から心情や考え方を、少しは見抜くことができる人なので
- ⑤ 中将が少しはものの情趣を解して、心遣いのできる人であればよいのに

問11 傍線部F「上おはして、勘当し給はんこそ、嬉しがるべけれ」に表れている男の気持ちの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 41

- ① 上の方が来られて、女君と会うことをお叱りになり私を追い出されるなら、女君を恋い慕う気持ちを断念する決心がつくので、かえって未練がましさがなくなり心が軽くなるだろう。
- ② 上の方が来られて、私の勝手気ままな振る舞いを止めることができなかつた中将をお叱りになるなら、私はなんとか追い出されずに済むので、女君への思いがさらに高まるだろう。
- ③ 上の方が来られて、私が許可なく女君のところに忍び込んだことをお叱りになっても、以後は上の方の許しを得て女君に会うことができるので、いつそ心が晴れやかになるだろう。
- ④ 上の方が来られて私をお叱りになるなら、女君を恋い慕っている私の存在が明らかになり、今後の交際をお願いする機会にもなるので、将来に希望が持てそうで心が弾んでくるだろう。
- ⑤ 上の方が来られて、私の入室を断り切れずに勝手に許した気弱な女君をお叱りになるなら、女君に嫌われて冷たくされた腹立たしさが少しは慰められるので、心が安らかになるだろう。

- ① 今日はあなたを何の前触れもなく急にお訪ねしましたので、驚いて素っ気ない態度を取り続けておられたのですが、あなたを深くお慕いしている気持ちが伝わっていないように思われて、悲しみの涙に暮れています。
- ② 今日はあなたが冷たい態度をお取りになり、かりそめの縁でしかないと思うと深い悲しみの涙が絶え間なく流れ落ちますが、あなたが次の逢瀬おうせをなんとか受け入れてくださるようにと、ひそかな願いを抱いています。
- ③ ずっと以前からあなたを恋い慕って、今日やっと会うことができただのに、近くに住んでいる権大納言とお間違えになられて、私につれない態度しか取ってくださらないので、落胆してしまい生きる氣力を失っています。
- ④ 恋をしている切ない心情をあなたが全く理解しないで、私に一刻も早く立ち去ることはかりを執念深く求め続けるので、今後は女君にお会いすることはできないと思い、悲しみの涙があふれて絶望の淵ふちに沈んでいます。
- ⑤ 女君にお会いする手引きをあなたにお願いしても、拒否されて立ち去ることばかりを求められ悲しみの涙が止まらないのですが、次には女君と会う機会を作ってくれるだろうと思い、期待で胸がふくらんでいます。

問13 Hの歌を中将が男に贈った意図として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

43

- ① 見知らぬ男が突然にやってきて女君を執念深く口説いているのを見て、泣いている女君が気の毒になり、「次に来られた時には私が女君に会えるように手引きしますよ」と巧みに機嫌を取って、男が安心して早く立ち去れるようにした。
- ② 強引に言い寄る男に辟易^{へきえき}している女君を見て、男に腹を立てて無情なことばかり言ってきたが、ひたすら女君を恋い慕っている男が次第に哀れになって、「女君を説得して会えるようにしてあげますよ」と慰めて元気づけようとした。
- ③ 男に当惑している女君がかわいそうなので、男に早く立ち去るように繰り返し促しても聞き入れず、上の方が女君のところに来られる気配もあるので、中将が「きつとまたお会いできる縁がありますよ」とおだてて、男を早く帰らせようとした。
- ④ 男が女君に恋い焦がれて涙を流しながら訴えているのに、女君は泣くばかりで一言も返事を返さないの、見るに見かねた中将が女君に代わって、「今日はお話もできませんでしたが、次には深い縁となるようにしましょう」と慰めようとした。
- ⑤ 男は強引すぎ女君は控えめすぎて二人の心情が通じ合っていないと感じたので、恋する男女の仲を取り持つ気持ちになって、「きつとまたお会いできるようにお手伝いいたしましょう」と、二人の縁がずっと続くことを願って励まそうとした。

(国語の問題は終わり)